

神奈川県立図書館における大学紀要

— 公共図書館で収集することの意義 —

菅井 紀子

はじめに

神奈川県立図書館（以下「当館」という）では、2005年度から、県民の方々を対象に県民公開講座を行っている。講座のメニューには図書館の仕事を紹介する「図書館大公開」、調べものに役立つ情報・ツールを紹介する「探し方入門」などととも、当館で所蔵する資料を紹介する「資料紹介講座」があり、筆者は、2012年度の「資料紹介講座」において、「大学紀要」を紹介する機会を得た。取り上げるのは日本の大学紀要である。

当館で大学紀要を多数所蔵していること、利用者からのレファレンスに活用できることは経験上承知していたので、資料群として気になる存在ではあったが、詳しく調べたことはなく、調べてみたいと思った。また、一般的な知名度はそう高くないように感じていたので、ぜひ講座で紹介してみたいと思った。

発表を機に、大学紀要の資料としての特性・評価や当館での所蔵数などを調査することができたので、紹介しつつ論じていきたい。

それによって、大学紀要の価値を認識し、当館での大学紀要の位置づけを確認するとともに、当館で収集することの意義を考えたい。

1 大学紀要とは

1.1 紀要とは何か

まず、「大学紀要とはどのような資料なのか」、「当館ではどれくらい所蔵しているのか」といった基本的なことから調査に取りかかった。

「紀要（きよう）」という言葉について、国語辞典、百科事典、図書館関係資料で確認した記述を引用すると、国語辞典には「大学や研究所などが

ら出す研究論文を収載した定期刊行物。」¹⁾と記載され、百科事典には「大学または研究所が、その所管教員または研究員の学術論文を総合的に発表する雑誌。年一回発行のものが多く。外国の学界は学派が中心で、研究を発表する報告 report、講演や会議経過を発表する会議録 proceedings、雑誌 bulletin, journal などがあるが、名称は一定しない。日本でも明治二十年代から学術論文は発表されたが、紀要と記したのは『東京帝国大学文科大学紀要』で、1914年（大正3）が初めであり、全国大学が紀要と称するようになったのは1952年（昭和27）からである。」²⁾と記載され、図書館関係資料には「大学の紀要報告は（以下紀要という）各大学、学部、附属研究機関等が、その大学、学部、又は附属研究機関の研究成果を集録し定期的に刊行する論文集である。学会誌が研究者個人の研究成果の発表の場であるのに比べて、紀要はそれと同時に大学がその対社会的アピールとして自己の大学の研究成果を集録することに、その存在理由があるといえよう。したがって市販されるものは少なく、寄贈又は交換されることがほとんどである。又、発行頻度は年刊が大部分を占めており、一般的にその発行期日はそれ程厳格に守られているとはいえない。もともと大学が任意に刊行するものであるために、一般の雑誌或いは学会誌等に比べると発行期日だけでなく、資料形態にしても任意的な色彩が濃く、そのことが紀要を図書館の資料としてまことに扱い難いものとしている。」³⁾と記載されていた。もとは中国で「要綱・要領を記す」⁴⁾意であったのが転用されたようだ。

言葉について簡潔に定義づけしている国語辞典、歴史についても教えてくれる百科事典、そして図書館側の視点で捉えて解説されている関係資料を読み比べる作業だけでも興味深く、文献が揃った図書館という場所で調べものをする楽しさを実感しながら様々な調査にかかったのだが、資料探しには苦労した。大学紀要そのものは多数存在しても、大学紀要について論じている文献はそう多くなく、特に近年のまとまった文献はほとんど見当たらなかったのだ。そこで、関係資料を丹念に追っていくことにした。

1.2 日本における紀要の定着

「紀要」は、「大学や研究所が、その大学、学部、または附属研究機関の研究成果を集録し、定期的に刊行する論文集。」と定義でき、主に雑誌の形態で刊行されているが、「日本独特の紀要乱立状態」⁵⁾であると言われていた。大学紀要は、今日の雑誌の起源であるヨーロッパからどのように伝わって日本に定着したのであろうか。

学術雑誌の発達過程については「歴史としての学問」⁶⁾に詳述されている。ヨーロッパの17世紀科学革命を支える制度的な背景として、学術雑誌の機能と学会の形成が挙げられる。学会を作って意思の交換をすること、その結果を印刷して速報するために雑誌を作ることが可能になった。

17・18世紀に個人編集の雑誌、学会アカデミーの紀要、大学の学位論文出版という原型が存在し、18世紀半ば以降、医学や農業、物理学等の専門誌が登場し、19世紀には専門分化時代を迎え、原型であった3者は衰亡の一途を辿った。

日本での受容については「大学紀要の輪郭とその取り扱い」⁷⁾の記述がわかりやすい。日本では、「明治期に大学・雑誌・学会が欧米の既成の制度としてまとめて移植され」、「ヨーロッパで17～19世紀にかけておこなわれた学術雑誌の近代化が明治期の短期間に進行した」ため、「専門分科した学会と帝国大学の紀要が同時並行的に発達し、学術雑誌の機能分化が未成熟なまま日本独特の紀要発行のシステムが定着し」たようだ。そして、「そのシステムは私立大学に真似され、戦後に新設された私立大学にもそのまま引き継がれ、日本独自の紀要乱立状態が出現し」、現在も続いているようである。

1.3 日本最初の大学紀要

日本で最初に発行された大学紀要は、1879（明治12）年に東京大学理学部が発行を始めた欧文誌“Memoirs of the Science Department, University of Tokio, Japan”と、その邦文版の「理科会粹」である⁸⁾。この紀要の欧文版の発行は、1877（明治10）年7月から1879（明治12）年8月まで東

京大文学部動物学教授であったエドワード・S・モース (Edward Sylvester Morse; 1838-1925) の進言がきっかけであったようで、初号には、モースの大森貝塚の報告が掲載されている⁹⁾。

市販はされず、発行部数も少なかったようである¹⁰⁾が、日本最初の大学紀要の著者は、お雇い外国人教授であった。

1.4 発行元となるのは

日本最初の大学紀要発行から130年あまりが経過した。ここで、大学紀要の発行元となり得る日本の大学について少し触れたい。

文部科学省の2012年度学校基本調査によると、日本の学校数は大学が783校、短期大学が372校となっている。教員数(本務者)は大学が177,571人、短期大学が8,917人となっている¹¹⁾。教員数は兼務者を含んでいない。

日本の出版社数は2012年3月現在3734社である¹²⁾。大学・短期大学の学校数は1,155校で、その3分の1の規模になる。大学紀要の発行は、大学、学部、大学院、附属研究所などが行っており、1つの大学に複数の発行元が存在することが多いので、実際には、1,155よりさらに多くの発行元が存在しうる。全ての大学が紀要を発行しているとは限らないが、それにしてもかなりの規模で発行されていると考えてよいのではないか。一大資料群であり、情報源である。

1.5 出版の特徴

「大学紀要報告類の取扱」¹³⁾でも触れられていることだが、「対社会的アピール」、「市販されるものは少なく、寄贈又は交換されることがほとんど」、「発行期日はそれ程厳格に守られているとはいえない。」といった大学紀要の出版には、

- ・ 通常の出版物の流通経路(書店)を通らず、従って非売品のことが多い。
- ・ 発行部数が少ない。
- ・ 特定の狭い利用者を対象として作られている。

- ・従って配布先が限定されている。
- ・探索のツールに乏しく、存在の確認が難しい。
- ・書誌記述（タイトル、著者、発行者、発行所、発行年など）が、十分にないものがある。

という「灰色文献」の特徴¹⁴⁾が当てはまる。当館は市販の流通ルートを通らないが貴重、重要で資料的価値の高い非売品資料の収集に努めており、灰色文献と呼ばれる官公庁や企業、業界団体等の調査研究資料類も積極的に収集してきた¹⁵⁾。当館が大学紀要を収集することは自然なものと納得できる。

外見の特徴としては、非売品である、ということで、製本やデザインが地味なものが多い。

学術紀要配送業務を行う業者も存在する。大学間における学術紀要配送業務の経費削減のためということで、契約している大学から紀要と配布先リストを預かって、それをまとめて送る、という業務を行っている¹⁶⁾。

当館にもそのような業者から、いくつもの大学の紀要が入った段ボールが届くことがあるが、発行元の数の多さがこのような業務に結びつき、商売が成り立つのであろう。



写真1 公開書架の大学紀要



写真2 書庫内の大学紀要

1.6 掲載内容

大学紀要に掲載されるのは、原著論文、研究ノート、資料、翻訳、注釈、判例研究、講演記録、書評、活動報告、博士論文要旨など多様な区分の記事である。大学によってそれぞれの区分の定義は異なる。

原著論文…独創的、かつ学術的内容で価値が認められるもの

研究ノート…速報性、新規性、アイデアなどに重点を置いたもの。

資料…学問研究のために実験、調査、統計などのデータをまとめたもの。

事例報告、実践報告など。

翻訳…評価が定まり、かつ比較的紹介されることが少ない作品を対象としたもの。

注釈…ある文献について、本文中の語句を取り上げてその意味を説明し、必要に応じてその根拠を示すもの。

といった規程を掲載している大学もある¹⁷⁾。

大きな特集を組む紀要、1冊（1号）に掲載されているのが1本の論文のみという紀要、2つの学部の紀要を1冊に載せていて、それぞれの巻号の異なる紀要¹⁸⁾など、様々である。2011年・2012年に発行された紀要の中には、東日本大震災の特集を組むものもあった¹⁹⁾。

1.7 大学紀要の評価

1.7.1 マイナスの評価

大学紀要の資料としての評価はどのようなものだろうか。文献には、大学紀要の存在について、「必ずしも高い評価を得ているとは言い難い」²⁰⁾と評価せざるを得ない記述が見られる。

審査が無い、非売品で入手しにくい、といった点がこのような評価につながったのであろうか、「紀要は学位論文を除けば学内の教員であれば殆んど無審査で掲載出来る故、学会誌に比較して玉石混合の感が無くもない」²¹⁾、「仲間うちだけに配付され、広く読者の目に触れずに消えていく」²²⁾、「秘密出版」²³⁾、「手工芸的でありながら名人芸ではなく、いわば旦那芸のような出版物」²⁴⁾などと言われ、「学問の進歩になんら寄与しないぐうたら

作文」²⁵⁾、「レフリー制度のある論文誌はゴマンとあるのに、それに採用されないような論文が載るとなると、“紀要ゴミ箱論”が生まれるのも当然」²⁶⁾といった厳しい論調の文献にも出会う。谷沢永一には、「アホばか間抜け大学紀要」という論文もある²⁷⁾。

これらの文献は、1968年以降全国に広がった大学紛争をきっかけにして学問のあり方が問われ、大学改革が叫ばれていた頃に書かれたものがほとんどである。

「無審査」であることに関しては、大学の自己点検・評価の実施や結果公表など、大学側の事情が関係するのだろうが、「現在では、学内の紀要にも査読システムを採用している大学が多くなってきている。」²⁸⁾ようで、ここで批判されていることが現在では必ずしも当てはまらない。「入手しにくい」点についても、インターネットを通じて CiNii²⁹⁾や各大学の学術機関リポジトリ³⁰⁾で等で入手できるものも増えている。

近年の文献ではどう評価されているのであろうか。

「学会誌への投稿論文と大学への紀要への投稿論文とは査読(レフリー)の水準の違いのために論文評価が異なるが、当然ながら、学会誌への投稿が受理された論文は評価が高く、大学で独自に刊行している同人誌的な研究誌である紀要の場合は評価が低い。」³¹⁾

これは大学教授の評価基準である論文の評価について書かれた文章であるが、やはり学会誌に比較して紀要の評価が低くなっている。学会誌と大学紀要を比べると、学会誌の方が評価が高い、というのがある程度共通した見方のようなのである。

1.7.2 査読について

学会誌と比較して、査読の水準面から厳しい評価が与えられている大学紀要であるが、ここで言う「査読の水準」とはどういったことであろうか。

「査読」には、「水準に達しているがどうかを審査するために読むこと。学術雑誌などで、寄せられた原稿(論文等)を編集者側でまず読み、誤りの有無や掲載の適否について判断意見を出すこと。学術雑誌の投稿論文(原

著・総説・展望などの論文) の場合は、複数のレフェリー(審査員)によって査読がなされ、独創性・論理性・客観性・信憑性・完結性・簡潔性などが厳密・厳格に審査される。これを通過して初めて、論文(一定水準を超えた論文)として認められ、掲載されることになる。」という記述³²⁾にあるように、2つのレベルがあると考えられる。

1段階目の査読は「寄せられた原稿(論文等)を編集者側でまず読み、誤りの有無や掲載の適否について判断意見を出す」比較的易しい査読で、大学紀要については、このレベルの査読を行うと見られてきた。

2段階目の査読は「複数のレフェリー(審査員)によって」、「独創性・論理性・客観性・信憑性・完結性・簡潔性などが厳密・厳格に審査」され、「これを通過して初めて、論文(一定水準を超えた論文)として認められ、掲載されることになる」厳しい査読である。学会誌はこのレベルの査読を行っていると思われる。

実際に、大学教員の審査の基準に関して、大体の基準として「単独著作を10点とした場合、単独の編著作7点、複数の共編著5点、共著4点、学会論文3点、学会発表2点、紀要論文1点」といった例が挙げられている³³⁾ことから、厳しい査読を経ないで掲載された紀要論文や厳しい査読を行わない大学紀要には厳しい評価が与えられる、という結果になるようだ。

1.7.3 プラスの評価

マイナス評価の一方で、大学紀要の利点や資料としての重要性について指摘している文献もある。「紙数制限のある学会誌に掲載出来ないすぐれた長論文も、紙数制限のゆるい紀要に掲載出来るし、又学会の存在しない分野の論文は紀要に依らざるを得ない。」³⁴⁾、「その年、一番自信のある論文は学内の紀要に投稿する学者もいる」³⁵⁾、「わが国でただ一か所の“紀要図書館”として富士の図書館を特色づけたらどうだろうか、ということである。では、大学・短大で発行のすべての紀要を集録した一大図書館を作ろう！」³⁶⁾といった記述のほか、若手の研究者の研究発表の場を確保することに意義があると言及しているもの³⁷⁾もある。

字数の多い長い論文や学会の存在しない分野の論文は大学紀要がカバーしている、といえそうである。同じ研究を長く続けて、「その1」「その2」のように息長く発表していく場としても機能しているようで、これらは、大学紀要の意義としては重要な点であると思われる。

例えば、早稲田大学名誉教授で英文学者の出口保夫氏は、「キーツとその時代」の研究業績により、1999年度に「早稲田大学におけるノーベル賞に相当する」³⁸⁾大隈記念学術褒章の記念賞を受賞しているが、この研究成果である「キーツとその時代」上下巻（中央公論社、1997年）のもととなったのは、早稲田大学教育学部が発行する「学術研究」という紀要への連載であった。

“紀要図書館”を目指した萩野公剛氏は、富士短期大学（現・東京富士大学）教授で数学者であった。1960年頃図書館建設を進めていた富士短期大学は、「短期大学の中では群を抜く」³⁹⁾と言われる図書購入予算を持ち、その図書館の特色として、教員の研究に必要であるが非売品のため買いたくても買えない全国の大学・短期大学発行のすべての紀要を集録しようと計画した。そのために「この小さくて無名に等しい富士短大へ紀要が送られてくる」⁴⁰⁾方策を考え、「受贈紀要のすべての論文名を集録した雑誌を発行」⁴¹⁾することを思いついた。こうして誕生した雑誌が「月刊文献ジャーナル」であった。

「月刊文献ジャーナル」は全国の大学紀要の論文の目次を紹介する雑誌で、1962年4月の1巻1号から2001年3月の40巻6冊（通巻421号）まで刊行されていた。探索のツールに乏しい大学紀要の世界では貴重な資料で、「国立国会図書館の「雑誌記事索引」と並ぶ偉業」⁴²⁾と称されている。

大学紀要に対して批判的な教員もいる中で、大学紀要を教員の研究に欠かせない資料と捉え、熱意を持って網羅的、継続的に目次情報を提供し続けることに尽力した大学教授もいたのであった。

2 当館における大学紀要

2.1 当館での収集について

これまで大学紀要についての概略を述べてきたが、ここで当館との関係を考えてみたい。

当館は1954年10月1日に発足、11月4日に開館記念式典を行っているのだが、当館の統計類には、雑誌の所蔵を示す数値が無かった。関係資料を探したところ、開館の頃、雑誌は157種所蔵していたようであることがわかった⁴³⁾。開館から3年ほどたった頃には「雑誌は約300種」、「雑誌の主なものをあげますと、世界・ジュリスト・(略)・大阪商大経済雑誌・(略)創刊号から完全に揃っております。なお将来とも学術雑誌、資料価値の高い雑誌はできる限り完全に揃ったものを集める方針であります。」となっている⁴⁴⁾。ここで挙げられている「大阪商大経済雑誌」は、現在の「経済学雑誌」(大阪市立大学経済学会発行)のことを指していると思われるが、確かに1937の創刊号から所蔵している。大阪商科大学は大阪市立大学の前身である。

このことから考えると、当館では開館当初から大学紀要を所蔵していたと思われる。その頃すでに「物を調べる図書館、研究する図書館」が特色であると述べられている⁴⁵⁾ので、大学紀要は調査研究に役立つ資料の一種と捉えられていたのであろう。

その頃、「大学紀要」(横浜国立大学経済学部)、「相模女子大学紀要」、「経済志林」(法政大学経済学会)、「法学論叢」(京都大学法学会)などの所蔵があったことも確認できる⁴⁶⁾。

開館当時の様子を上司に尋ねたところ、先輩職員から聞いた話として、当館は、例えば文学ならば、

文学部のある女子大学>当館>文学部のある短期大学
をイメージして資料収集を行っていたこと、国立国会図書館の発行する書誌(『全日本出版物総目録』等)を見て積極的に寄贈依頼をしていたこと、大学紀要だけを特別視はしていなかったが、カレントな情報がわかる雑誌(特に当年分)はレファレンスブックとして捉えていたことなどを教えてくれた。

また、雑誌については、当年分はレファレンス資料としてカウンター付

近に置き、何冊か揃ったところで合本製本を行って図書として受け入れていたという事も教わったが、これで、開館当初の雑誌の所蔵統計が見つからなかったことに合点がいった。実際に、当館図書課で保管する図書原簿を1冊目から繰ってみたところ、大学紀要と思われる関東学院大学経済研究所発行の「経済系」は、図書原簿6冊目の52ページ、昭和30年12月に、5号分が「合本1冊」として登録され、図書の登録番号を与えられていることを確認できた。

当館の資料収集に対する当初の考え方は、現在もある程度引き継がれていると思うが、開館当初から調査・研究を重要視していたことがわかり、当館の目指すところを改めて認識した。

現在でも、逐次刊行物選定基準では、「大学、研究所、学会等の刊行する紀要及び研究論文集は、広範囲、かつ、継続的に収集する。」と定めている。



写真3 創刊号から所蔵している大学紀要（当館で合本製本している）

2.2 当館での所蔵数

開館当初から収集してきた大学紀要であるが、当館でどれくらい所蔵しているのか、大学紀要だけの統計はないため、所蔵数はわからなかった。そこで、雑誌の所蔵データから大学紀要の可能性を持つ刊行物のリストを抽出し、書庫でリストと照合しながら現物調査を行い、大学紀要と思われるタイトルを選別する作業を行った。

- ・大学や研究所などが発行している
- ・教員の研究成果（論文）が掲載されている

ことを選別の条件にし、現物を確認しながら調査した結果、2403（書誌数）の大学紀要の所蔵が確認できた（2012年7月現在）。これは、当館で所蔵する雑誌の総累計7421（書誌数）の32.4%を占めており、当館で所蔵する雑誌の約3分の1が大学紀要類であることが判明した。

また、当館は、神奈川県に関する資料は大部分を図書として登録しているが、その中に県内に基盤を置く大学・短期大学の紀要も含まれているため、図書の所蔵データから資料形態と出版者で絞り込み検索を行い、大学紀要の可能性を持つタイトルをリストアップ、雑誌データとの照合と現物調査を行って、上記の所蔵数に加えるべきタイトルを選別する作業を行った。その結果、16（書誌数）の大学紀要が確認できた（2012年7月現在）。当館での所蔵数は2419（書誌数）になる。

ここで「書誌数」というのは、大学名や学部名の変更などで誌名変遷があった場合、継続前誌の書誌データも継続後誌の書誌データも作成するため、「2」と数える考え方で数えて行って2419あった、ということである。かなりの数を所蔵しているな、というのが率直な感想である。

NDC分類による内訳は下図のとおりである。逐次刊行物が分類される0類が931（38.5%）と最多で、当館の主要な収集対象である3類の大学紀

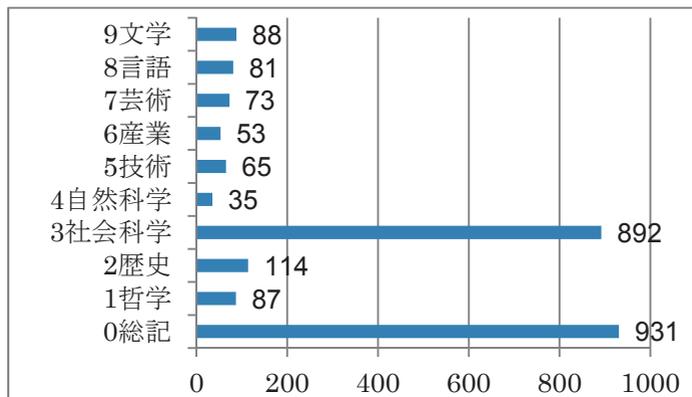


図1 当館所蔵大学紀要（2419書誌数）の分類別内訳

要が 892 (36.9%) と続く。

保管場所については、新館 3 階の新聞・雑誌室で全国の主な大学発行の紀要の最新号を 150 誌ほど公開しているが、あとは全て書庫内に保管されている。

利用の際は、当館は雑誌を個人貸出していないので、館内で閲覧していただくことになる。

現在、新規の収集対象紀要を選定する際は、国立国会図書館の書誌情報提供サービスを利用して、逐次刊行物の区分に表示された大学紀要のリストから選定を行っている。また、現在では書庫の狭隘化などの理由から、短期大学（県内に基盤を置く短期大学を除く）や学生論文掲載のみの資料は、受入していない。

2.3 利用法・活用法

大学紀要はどのようなことに使えるのであろうか。一言で言うと「調べものに役立つ」のである。

書庫で現物調査をしながら強く感じたのが、ありとあらゆる事柄について研究し、発表している人がいる、ということであった。調査の手を止めて読みふけってしまうこともしばしばであった。講座の参加者に紹介したいと思う論文がいつの間にか 100 を超えていた。

ちょうどそんな時、「論文を読もう！」という新聞記事⁴⁷⁾に出合った。「大学や大学院の論文なんて、書いたことも読んだこともない。それが普通。」「でも、日本では様々な分野で日々、最先端の研究が行われていて、その成果が論文なのだ。読まないなんてもったいない。」筆者が講座で言おうと考えていたことが記事になっていて、そのタイムリーさに驚いた。

新聞記事は国立国会図書館関西館で所蔵している博士論文のことや、大学の非常勤講師を努めながら、ブログやライブなどで、図書館で見つけてきたおもしろい論文を広めようと活動をしている学者芸人のサンキュータツオ氏を紹介している。このような活動をしている芸人がいて、その活動が成り立つということは、世の中に「知る」ことを楽しむ人々が多い、と

いうことの表れなのであろう。

このあらゆる事柄の研究がレファレンスの際に力を発揮する。10年ほど前、漢詩の邦訳を探している、という質問を受けたことがあった。事典類や関連資料を何冊も確認したが見つからず、最終的に大学紀要で翻訳を見つけたことがあった。質問の詳細は覚えていないが、大学紀要は便利な資料である、と認識したのはそれがきっかけであったことは覚えている。最近も、オーストラリアのアボリジニの「盗まれた世代」についての問い合わせに当館所蔵の紀要論文が役立った事例がある。

現物調査の際には、世界各国のホームレスによるフットサルのワールドカップが開かれていること⁴⁸⁾、松本城・姫路城・彦根城・犬山城の案内板の英語には日本語の案内板と矛盾した内容や文法的に誤った表現が見られるものがあること⁴⁹⁾⁵⁰⁾、テレビ番組で出演者以外の笑い声が流れてくる“録音笑い”についての研究があること⁵¹⁾、市販されている日英翻訳ソフトを用いて仏教用語を翻訳することは現時点ではほとんど不可能であること⁵²⁾、タイでは住民が救急活動を行う住民救急が盛んで100年ほどの歴史があること⁵³⁾、などについて学んだ。

その大学が所在している地域のことを研究する論文も多く見受けられた。三重県四日市市では“四日市とんてき”というご当地グルメでまちづくり活動が展開されていること⁵⁴⁾、広島県尾道市と愛媛県今治市を結ぶ高速道路、通称しまなみ海道で自転車のロードレース“ツール・ド・しまなみ”を開催すると経済波及効果は8億円であること⁵⁵⁾、北海道網走市では、迷惑施設として排除の傾向が強かった行刑施設が、近年、地域の活性化にとって価値あるものとして歓迎される存在になりつつあること⁵⁶⁾、沖縄県の古謡の一つである島歌の歌碑巡りを容易にするため、建立場所へGPS情報を元に正確に案内するシステム制作が研究されていること⁵⁷⁾、などが該当する。

このような論文は、その地にある大学で研究することに意義がある。大学での研究が地域に還元され、地域の活性化に寄与する可能性があるのだ。

当館では全国の自治体史の収集にも力を入れているが、それとともに大

学紀要も地域研究時の資料となり得る。

ほとんどの論文には、注や参考文献が掲載されている。これは一般雑誌や一般のインターネット情報とは異なる点である。その論文を入口にして、さらに調査を進めていくことができるし、記述の信頼性を保証してくれることもある。レファレンス担当になった当初、「その図書や論文に注や参考文献が掲載されているか、図書なら索引が付いているか、この点はとても大事。」と教えてくれた先輩がいた。この点から考えると、大学紀要に掲載されている論文は有用である。

2.4 検索するには

大学紀要の論文は、「CiNii Articles - 日本の論文をさがす」⁵⁸⁾で検索することができる。これは国立情報学研究所が提供する学術情報検索のためのデータベース・サービスで、学協会刊行物・大学研究紀要・国立国会図書館の雑誌記事索引データベースなどの学術論文情報が検索できる大変有用なものである。本文が参照できる論文もある。

近年では、学術機関リポジトリを設置している大学も多数あり、ポータルサイト⁵⁹⁾もある。

3 県立図書館が出す紀要

ここまでは大学紀要について論じてきたが、当館で発行する紀要について少し触れたい。

「神奈川県立図書館紀要」は、「職員の日常の業務に根ざした研究活動の成果を定期的に報告する刊行物」⁶⁰⁾という位置づけで発行されている。創刊号(1985.3)から第9号(2011.3)まで刊行され、今号が第10号となる。

都道府県立図書館で紀要を発行しているところは、東京⁶¹⁾・大阪⁶²⁾で確認できるが、多くはないようである。

司書が日頃の業務を通じて研究したことを論文として発表し、図書館活動に活かすことは重要であるし、また、紀要が継続的に発行できる力を職員が有しているということは、その図書館の強みになる。

おわりに

これまで、大学紀要の歴史、出版の特徴、資料としての評価、当館での所蔵状況、活用法などを論じてきた。

日本では数多くの大学紀要が存在するが、大学の任意的出版物であるために流通にのらず、狭い利用者を対象にしており、そのためにそこに載る論文の評価も低くなりがちであった。近年は外部の査読者を迎えて質を高める努力をしている大学紀要も多く見られ、信頼性の高い情報を印刷媒体とともにインターネットも活用して広く社会に向けて公表しよう⁶³⁾、という動きも見られる。また、学会誌に比べて、長い論文や継続の研究が発表しやすい長所も認識されている。

当館では開館当初から調査・研究に役立つ資料として大学紀要を所蔵しており、現在 2419 種を所蔵している。あらゆる事柄が研究されているので、調べものに有用である。そして、そのような資料を誰にでも開かれた公共図書館である当館で収集・提供することに意義がある。

今後も、大学紀要を、調査・研究を重視する当館の特色ある資料と捉え、収集・提供・活用を図っていきたい。

注、引用・参考文献

- 1) 日本国語大辞典 第4巻 第二版, 小学館, 2001, p. 392.
- 2) 日本大百科全書 第6巻 小学館, 1985, p. 774-775.
- 3) 鬼頭当子. “大学紀要報告類の取扱”. 雑誌の管理と利用. 日本図書館協会, 1967, p. 264.
- 4) 諸橋轍次. 大漢和辞典 巻8. 修訂版, 大修館書店, 1985, p. 936.
- 5) 長谷川豊祐. 大学紀要の輪郭とその取り扱い. 現代の図書館. 1993, 31 巻 4号, p. 228.
- 6) 中山茂. “近代科学の成立と雑誌・学会”. 歴史としての学問. 中央公論社, 1974, p. 109-160.
- 7) 前掲 5) p. 228.
- 8) 磯野直秀. 本邦最初の大学紀要. 慶應義塾大学日吉紀要 自然科学. 1986, No. 2,

p. 48-56.

- 9) エドワード・エス・モールズ撰. 大森介壺古物編. 明治文化全集. 第 24 巻, 日本評論社, 1930, p. 253-280.
- 10) 前掲 8) p. 50.
- 11) 文部科学省. “学校基本調査 平成 24 年度 (速報) 結果の概要”
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/houdou/___icsFiles/afieldfile/2012/08/27/1324976_3_1.pdf (参照 2012-09-12) .
- 12) 出版ニュース社. 出版年鑑. 平成 24 年版 1 (資料・名簿編), p. 306.
- 13) 前掲 3)
- 14) 花田岳美. 日本における「灰色文献」の現況. 情報の科学と技術. 1991, 41 巻 12 号, p. 895-901.
- 15) 神奈川県立図書館 50 年の歩み. 神奈川県立図書館, 2004, p. 87.
- 16) 株式会社藤圭. “学術紀要配送業務”
<http://www.fuji-yosi.co.jp/cgi-bin/fujiyoshi/sitemaker.cgi?mode=page&page=page1&category=0> (参照 2012-10-13) .
- 17) 福岡国際大学紀要 投稿規程. 福岡国際大学紀要. 2012, 第 27 号, 巻末.
- 18) 富山国際大学現代社会学部が発行する「富山国際大学現代社会学部紀要」第 2 巻 (2010) には、国際教養学部紀要第 6 巻が収載されている。
- 19) 例を挙げると、東京大学大学院情報学環が発行する「情報学研究 調査研究編」No. 28 (2012) では、被災地における人々が震災直後そのような情報行動をとったか、震災後、どのような困難を経験したか、といった調査の結果を掲載している。
 日本大学法学部新聞学研究所が発行する「ジャーナリズム&メディア」第 5 号 (2012) では、既存のマス・メディアが直面した現実の報告とマス・メディアの対応を実証的に分析し検討する特集が組まれた。
 仙台市にある尚絅学院大学が発行する「尚絅学院大学紀要」第 61・62 号合併号 (2011) では、実際に経験し、考え、学んだことを 17 名の教員が伝えている。
- 20) 糸賀稚児・関秀行. 論文の発表と引用から見た大学紀要. Library and

Information Science. 三田図書館情報学会, 1986, No. 24, p. 124 .

- 21) 鮎澤修. 大学刊行物の収集と利用. 図書館雑誌. 日本図書館協会, 1976, 70 巻 7 号, p. 251.
- 22) 紀要論文のあり方 (ペーパーナイフ). 読売新聞. 1975 年 6 月 2 日, 朝刊, 7 版, 6 面.
- 23) 中尾佐助. 大学の「紀要」(日記から). 朝日新聞. 1975 年 3 月 29 日, 夕刊, 3 版, 3 面.
- 24) 石田周三. わが国の大学紀要についての報告. 大学図書館研究. 1976, 9 号, p. 8.
- 25) 谷沢永一. 署名のある紙礫. 浪速書林, 1974, p. 20.
- 26) 大学紀要・研究所年報を考える. ファルマシア. 1983, 19 巻 1 号, p. 25.
- 27) 谷沢永一. アホばか間抜け大学紀要. 諸君. 1980, 第 12 巻第 6 号, p. 160-173.
- 28) 谷岡一郎. 「社会調査」のウソ. 文春新書, 2000, p. 100.
- 29) 国立情報学研究所. “CiNii Articles - 日本の論文をさがす”
<http://ci.nii.ac.jp/> (参照 2012-10-21) .
- 30) 大学等の研究機関が、その知的生産物を電子的形態で集積し、保存し、無料で公開するために設置する電子アーカイブシステム
- 31) 松野弘. 大学教授の資格. NTT 出版, 2010, p. 53.
- 32) 白佐俊憲. レポート・論文・調査・研究基礎用語辞典. 川島書店, 2004, p. 183
- 33) 前掲 31) p. 93-94
- 34) 前掲 21)
- 35) 前掲 28)
- 36) 萩野公剛. 私学随想 富士のさざれ石. 富士短期大学出版部, 1971, p. 84-85.
- 37) フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia). “紀要”
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B4%80%E8%A6%81> (参照 2012-10-16) .
- 38) 早稲田大学. “大隈記念学術褒章”
<http://www.waseda.jp/kyomubu/new/ookumakinen.html> (参照 2012-10-25) .
- 39) 皓星社. “雑誌記事索引集成データベースざっさくプラスNEWS”
<http://info.zassaku-plus.com/news.php?p=2> (参照 2012-10-16) .

- 40) 前掲 36) p. 84.
- 41) 前掲 36) p. 84.
- 42) 前掲 39)
- 43) 神奈川県図書館報. 第 21 号, 1955 年 2 月 20 日, p. 2.
- 44) 県立図書館にはどんな本があるか. 神奈川文化. 神奈川県立図書館, 1957 年 7 月号, p. 2.
- 45) 前掲 44)
- 46) 神奈川県公共図書館定期刊行物総合目録 第 1 編 雑誌・新聞篇 昭和 33 年 3 月 1 日現在. 1958.
- 47) 論文を読もう! (be report). 朝日新聞. 2012 年 8 月 18 日, 朝刊, b4 面.
- 48) 岡田千あき. なぜ貧しさの中でスポーツをするのか ホームレスワールドカップ日本代表「野武士ジャパン」の事例から. 人間科学研究科紀要. 大阪大学大学院人間科学研究科, 2012, 第 38 巻, p. 61-78.
- 49) 福島一人. 観光英語 (1): 国宝天守をもつ松本城の案内板の英語. 情報研究. 文教大学, 2011, 第 44 号, p. 41-58.
- 50) 福島一人. 観光英語 (2): 国宝天守をもつ松本城の案内板の英語と比較した姫路城、彦根城、犬山城の案内板の英語. 情報研究. 文教大学, 2011, 第 45 号, p. 15-43.
- 51) 北折充隆. 録音笑いの印象に関する研究. 金城学院大学論集 人文科学編. 金城学院大学, 2011, 第 8 巻第 1 号, p. 11-17.
- 52) 東森勲. 日英翻訳ソフトによる仏教用語の翻訳可能性について. 仏教文化研究所紀要. 龍谷大学仏教文化研究所, 2010, 第 49 集, p. 1-29.
- 53) 永田尚三. 住民救急の研究 タイ・台湾の事例からわが国への導入可能性を考える. 武蔵野大学政治経済学部紀要. 武蔵野大学出版会, 2011, 第 3 号, p. 55-73.
- 54) 小林慶太郎. 四日市とんてきとまちづくり 食によるまちづくり試論. 四日市大学総合政策学部論集. 四日市大学学会総合政策学部部会, 2012, 第 11 巻第 1・2 合併号, p. 87-100.
- 55) 小谷範人ほか. 「ツール・ド・しまなみ」開催およびホテル建設による経済波及効果について. 尾道大学経済情報論集. 尾道大学経済情報学部, 2011, Vol. 11

No. 2, p. 45-57.

- 56) 横田勉. 網走市における行刑施設の受容と共存. 国際広報メディア・観光学ジャーナル. 北海道大学大学院国際広報メディア観光学院, 2012, No. 14, p. 43-69.
- 57) 又吉光邦. GPSを用いた鳥歌(琉歌)歌碑廻りシステムの制作 Android形態とGoogle マップによるピンポイント探訪. 産業情報論集. 沖縄国際大学産業情報学部, 2011, 第7巻第2号, p. 39-48.
- 58) 前掲29)
- 59) JAIRO 学術機関リポジトリポータル. 日本の学術機関リポジトリに蓄積された学術情報(学術雑誌論文、学位論文、研究紀要、研究報告書等)を横断的に検索できる。そのデータの中から論文にあたるものはCiNiiでも検索可能。2012/10/25現在 233機関 1,431,074件。
<http://jairo.nii.ac.jp/> (参照 2012-10-25)
- 60) 浅沼知行. 編集後記 紀要の志すもの. 神奈川県立図書館紀要. 神奈川県立図書館, 2011, 第9号, p. 142.
- 61) 東京都立図書館. “研究紀要”
http://www.library.metro.tokyo.jp/about_us/kankoubutsu/tabid/2083/Default.aspx (参照 2012-10-25) .
- 62) 大阪府立図書館. “大阪府立図書館紀要”
<http://www.library.pref.osaka.jp/lib/kiyo.html> (参照 2012-10-25) .
- 63) 立命館大学人間科学研究所. “立命館人間科学研究投稿と執筆の案内”
<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/hs/hs/publication/pdf/toukoutosippituanannai.pdf> (参照 2012-10-24) .